

玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会
第4回シンポジウム

玉川上水系（玉川上水・分水網・外濠・日本橋川）保全再生への道

資料集 -2

我が町の玉川上水系関連遺構 100 選

目次

1. 玉川上水上流区間・立川市	1
2. 玉川上水中流区間・小平市	5
3. 玉川上水下流区間・新宿区	9
4. 外濠	13
5. 日本橋川	16
6. 玉川上水分水・三田用水	18

2020 年 1 月 18 日

玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会事務局

1. 玉川上水上流区間・立川市 萩本 悦久（玉川上水の自然保護を考える会）

玉川上水を開削中、砂川地域では、まっすぐに掘ってきた水路が、立川断層にぶつかったことで、右側に大きくう回した。さらに、交差した古残堀川が、立川断層に沿って、低い場所を流れていたことで、残堀川の流れを変え、さらに、玉川上水を築堤して底面を嵩上げした。

ところで、立川市内には、砂川分水（明暦 3 年・1657）、殿ヶ谷分水（享保 5 年・1720）、柴崎分水（元文 2 年・1737）、源五右衛門分水（明治 40 年・1907）の 4 分水が開削された。

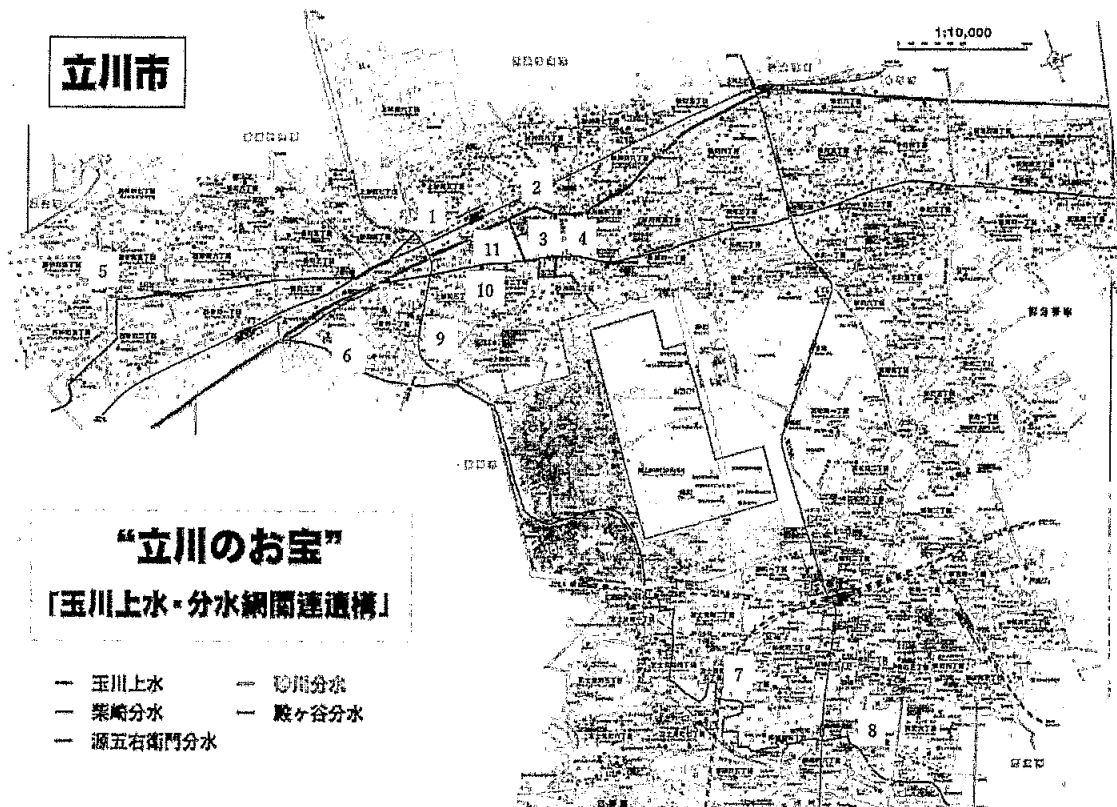
現在も玉川上水から取水し、流れているのは、砂川分水と柴崎分水である。特に、柴崎分水は、柴崎町に唯一残る水田で稲作が行われており、水路は、昔のまま多摩川へ流れている。

分水は、主に、飲料水や農業用水として使われていたが、明治に入り、近代産業の変革期に甲武鉄道が開通し、水が必要になり、砂川分水の水が使われることになり、立川の発展につながった。

100 選エントリー遺構

番号	名称	100 選番号
1	旧残堀川の開削遺構	9
2	古残堀川交差付近の大曲と築堤遺構	10
3	玉川上水の通船と巴河岸跡	11
4	玉川上水に隣接した金毘羅山	12
5	殿ヶ谷分水記念碑と開渠遺構	48
6	柴崎分水の中島水車遺構	49
7	柴崎分水の中央線掛樋	50
8	柴崎分水廻り水路と水田。	52
9	砂川分水の旧田用水（田堀）遺構	53
10	砂川分水の開渠遺構	54
11	源五右衛門分水の遺構群	55

遺構分布図

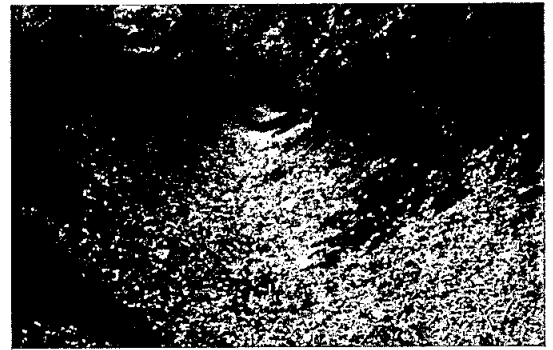


No.9 旧残堀川の開削遺構

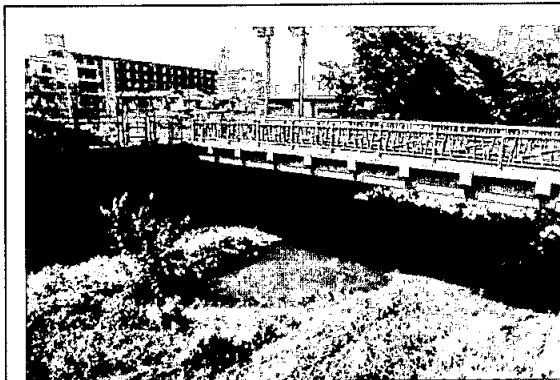
担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

見影橋下流付近に立川断層があり、この断層の西側下端に沿って古残堀川が流れていた。玉川上水を開削するため、古残堀川を愛宕松（草橋）といわれた地点から大きく天王橋付近まで迂回させ、玉川上水に合流させ助水とした。明治41年、水質汚染等のため、玉川上水への合流を廃止し、ほぼ現位置で残堀川を伏せ越しで横断し多摩川へ流す。昭和35年、日産自動車工場建設に合わせ現ルートに改修した。



旧残堀川（近くの玉川上水に流れ、助水とした）



残堀川の下を玉川上水が伏せ越で流れる



旧残堀川に、木の橋が架けられていた跡

No.10 古残堀川交差付近の大曲と築堤遺構

担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

狭山丘陵最西端から、玉川上水を超え立川駅方向に立川断層が走る。玉川上水開削の折、砂川地域でこの断層にぶつかる。また、こんびら橋周辺では、玉川上水上流の側道と橋との連絡および、断層下端部分に古残堀川が流れ、低くなっていたため、底面を嵩上げするため築堤。また、下流側の掘削量を少なくすることなどのため、流路全体を右岸側に大きく湾曲させていたのではないかと推測される。



こんびら橋付近で、水路が大曲している



右岸が築堤された玉川上水（見影橋下流）



古残堀川との交差付近は低いため、築堤する

No.12 玉川上水に隣接した金毘羅山

担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

玉川上水が立川断層を通り抜ける右岸側に、高さ15mの小高い山が築かれている。

安政年間（1854～1860）に、砂川村名主の砂川家が願主となり、頂上に、富士浅間神社、中段に金毘羅神社、下段に秋葉神社を勧請したと伝えられる。

この山は、開削工事のための測量の物見台、その後の流路などの監視所の役割をした。また、新田開発のための残土を積み上げたという説もある。



金毘羅様は、玉川上水で舟運が行われ、舟神様として祀られ、それからこの山を金毘羅山と呼ばれるようになった。



上段に富士浅間神社、金毘羅神社がある



中段に秋葉神社がある

No.48 殿ヶ谷分水記念碑と開渠遺構

担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

殿ヶ谷分水は、享保5年（1720）に、享保の改革による新田開発に伴い開削された水路である。取水口は、拝島駅南口平和橋左岸下流にある。この分水により、殿ヶ谷、宮沢、中里の三新田が開発された。

殿ヶ谷分水は、昭和48年まで開渠で流れていたが、その後覆蓋化され、一部は、生活道路や緑道として利用されている。覆蓋に伴い、地元の篤志家（宮崎光一氏）により、殿ヶ谷分水跡碑が建立された。



殿ヶ谷分水の傍に「馬頭観世音」が祀られていた



一部水路が開渠で残る（西武拝島線脇・一番町）



阿豆佐味天神社境内に殿ヶ谷分水跡碑がある

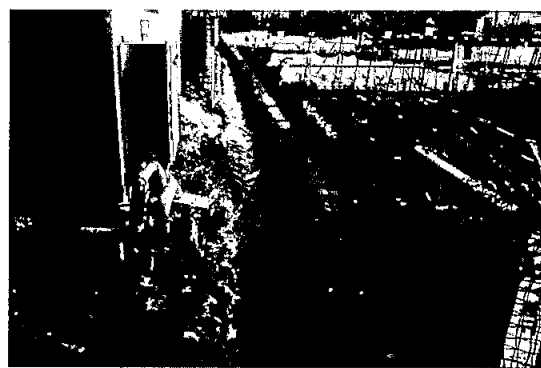
No.52 柴崎分水廻り水路と水田

担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

柴崎分水の流末は、立川崖線の下端を流れる根川と合流し、多摩川へと流れる。この根川と合流する直前に、現在もなお分水の水を引いた稲作が行われている。

平成 29 年には、立川公園のカニ柄ガラ広場に隣接する「がにがら田んぼ」として、水路とともに再整備されている。維持管理は、市民団体の「ガニガラ田んぼネット」が行っている。



住宅地に流れる柴崎分水



昭和 30 年代頃の田んぼ



今も残る立川市唯一の田んぼ

No.55 源五右衛門分水の遺構群

担当：玉川上水の自然保護を考える会

概要

源五右衛門分水は、砂川村名主の砂川源五右衛門の個人分水路で、明治初年（1868）あるいは、明治 40 年（1907）頃に設けられたとする説がある。はじめは、砂川分水の分水として、古残堀川の流路跡に分水路を設置した。また、玉川上水から、直接分水して、砂川分水を伏せ越して交差させ、下流の分水路に接続させたと考えられる。現在は、見影橋詰上流に取水口がある。



取水口は、見影橋詰上流にある。



昭和 30 年代頃の源五右衛門分水



流泉寺脇に、源五右衛門分水の遺構がある

2. 玉川上水中流区間・小平市 鈴木 利博（学び舎江戸東京ユネスコクラブ）

(1)小平分水路網50kmは生きていることを確認
小平には、玉川上水・野火止用水・小川分水・田無分水・鈴木分水・大沼田分水など9分水全長50kmが残る。分水口9か所が整備活用。

(2)「玉川上水・分水網関連遺構100選」へ

①2018年5月、玉川上水ネット・小平市内の玉川上水関連団体・玉川上水再々発見の会等と協力。「わが町の宝物」玉川上水本線・分水網合わせて40件を遺構100選候補に申請。

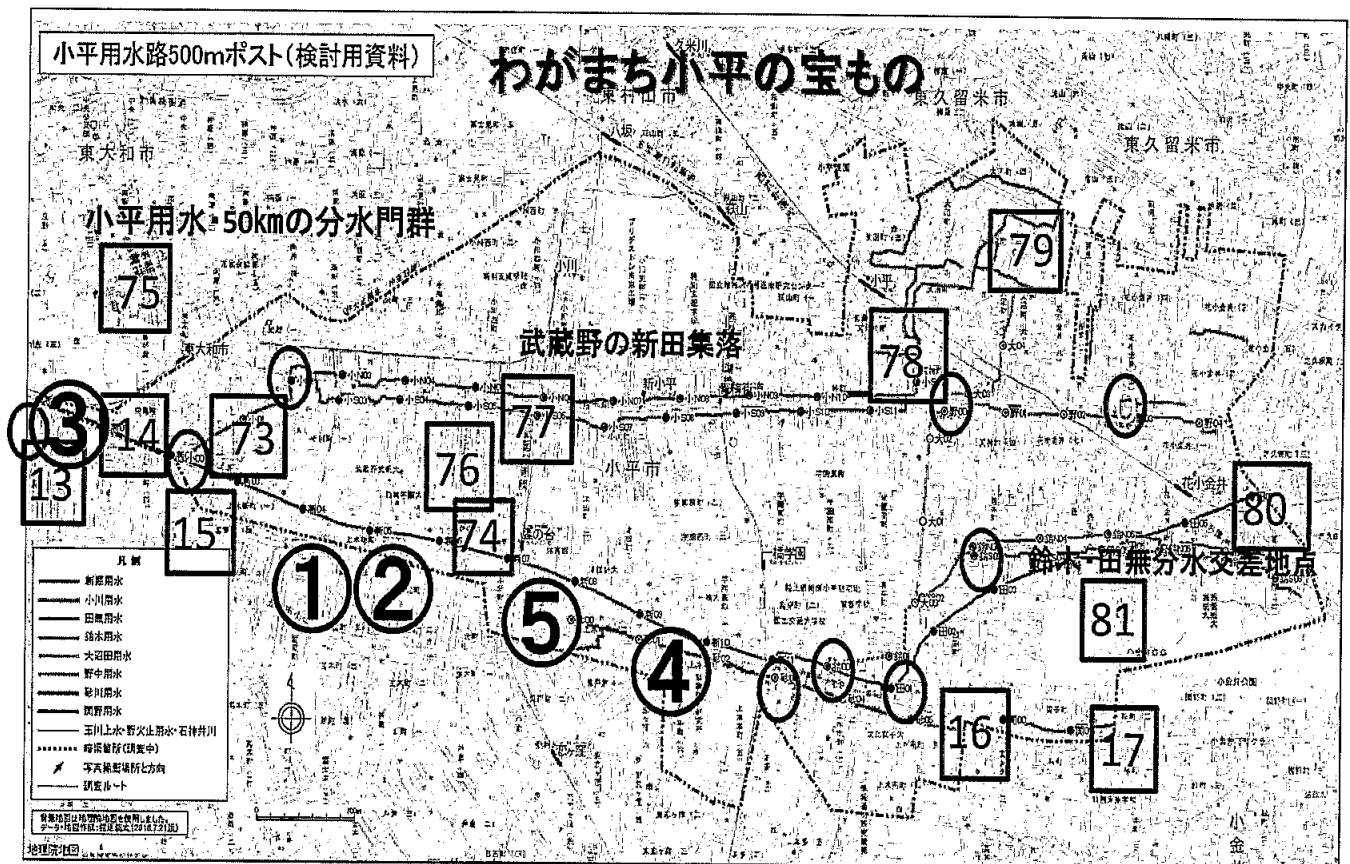
③結果 玉川上水本線関連10件（選考委員関連5件含む）、分水関連9件、合計19件認定

④開渠で水が流れていること。“江戸の古地図がそのまま小平”。水の恩恵の小平であること。

(3)関連遺構100選認定（100選NOと名称）19件

番号 遺構名称

- 1 玉川上水素掘り水路（開渠区間）
- 2 水路沿いの自然生態系
- 3 玉川上水分水改正と分水口遺構
- 4 玉川上水水番所（屋）・水衛所跡
- 5 玉川上水の通船遺構
- 13 水道原水流過と小平監視所
- 14 清流復活事業と上水小橋
- 15 小川橋と石橋供養塔
- 16 名勝小金井桜（サクラ）
- 17 名勝小金井桜の中心地・小金井橋
- 73 分水改正と新堀用水
- 74 新堀用水の小島水車遺構
- 75 小平用水・50kmの生きた水路と分水門群
- 76 青梅街道の小川分水と新田開発
- 77 武蔵野を象徴する新田集落の風景
- 78 小川分水の築樋遺構と悪水処理
- 79 大沼田分水の築樋遺構
- 80 田無分水と田無宿
- 81 鈴木分水と掛樋・鈴木遺跡



NO.1 玉川上水素掘り水路



玉川上水素掘り水路(小平市)



上水小橋



世塚

玉川上水は、承応3年(1653)羽村取水堰から江戸・四谷大木戸までの43kmは素掘りの開渠。江戸市中は暗渠で配水。この開水路は、淀橋浄水場が昭和40年(1965)に東村山浄水場へ合併移転するまで維持。現在は、羽村取水口から杉並区の浅間橋の30kmが国の史跡指定に。但し、わずかな水しか流れていない中下流区間では、乾燥や樹木の繁茂による法面崩壊も徐々に進行。

NO.2 水路沿いの自然生態系



四季折々の自然の中の散歩道

昭和30年代、東京の市街地は郊外へ。武蔵野台地を東西に貫流する玉川上水は緑地としての評価高まり、都市緑地として指定。一方、淀橋浄水場の廃止に伴い小平監視所下流は通水廃止、上水路の機能失い、埋め立て、道路・公園への転用の動き。三鷹・武蔵野・小平の市民の保全活動始まる。玉川上水は、水と緑の回廊、緑地として、水辺を軸とした豊かな動植物の生態系として地域住民に親しまれるようになる。



市の鳥“コゲラ”

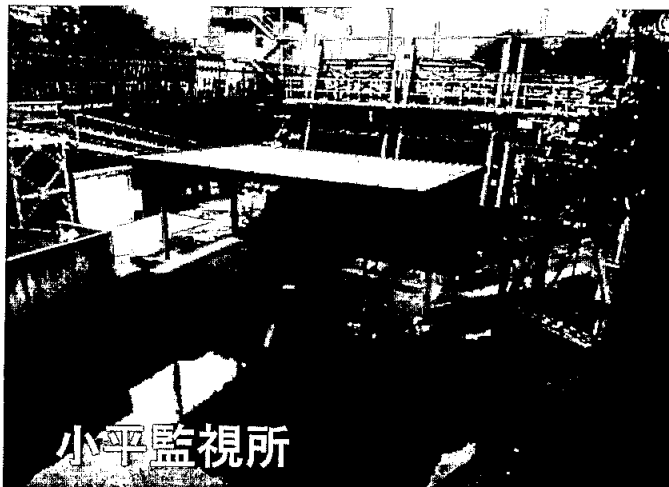


ニリンソウの群落



コサギ

NO.13 水道原水流過と小平監視所



小平監視所

小平監視所
水道原水として
東村山浄水場へ
送られる



玉川上水

昭和38年(1963)淀橋浄水場の跡地の再開発計画で東村山浄水場への移転が決り、小平水衛所を整備。羽村から取水した水道原水を東村山浄水場へ配水する工事が行われる。

昭和40年(1965)淀橋浄水場の移転・廃止で、監視所直下の流れは停止となる。千川上水下流の分水は一部利用の為境浄水場経由で昭和50年(1980)頃まで配水されたがやがて空堀となる。

昭和55年(1980)、熊川・砂川・小平水衛所が統合整備され、昭和58年(1983)野火止用水の清流復活事業と合わせ小平監視所として再整備された。

旧小平水衛所

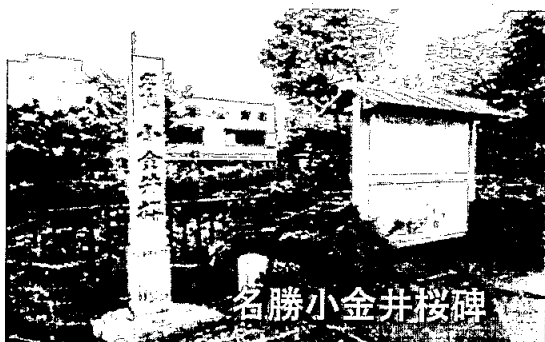
①野火止用水口、②小平用水口(新堀用水) 滔々と流れる玉川上水

NO.16 名勝小金井桜(サクラ)



五日市街道の小金井桜

享保年間(1716～1735)幕府は、武蔵野の新田開発を進める。元文2年(1737)川崎平右衛門に命じ吉野、常陸桜川の名品を玉川上水の土堤に植樹。文化～天保年間(1804～1844)文人墨客が観桜に訪れ、広重の浮世絵や江戸名所図絵に描かれ江戸の名所となる。明治中期には国木田独歩武蔵野に描かれ、大正13年(1924)小金井桜は国の史跡名勝に指定。隣接地は小金井公園となるなど江戸東京へとつながる近郊緑地の原型といえる。



名勝小金井桜碑

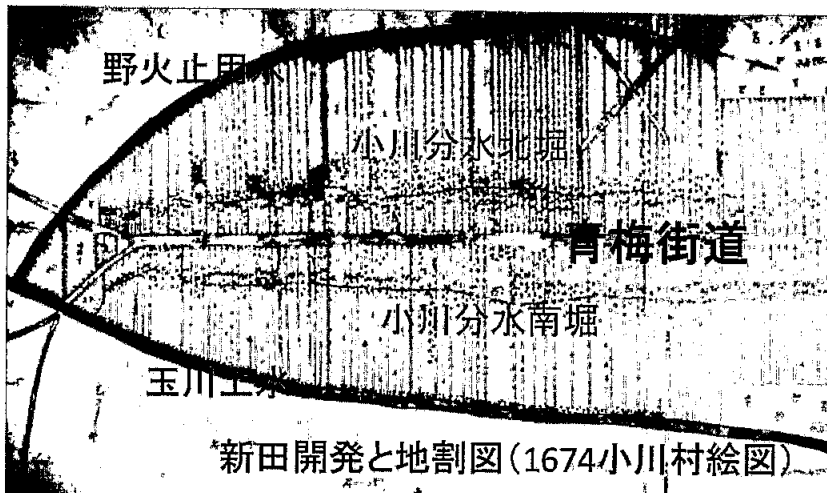


小金井桜樹碑

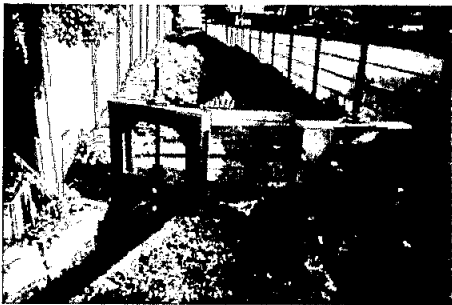


小金井橋夕照(広重)

NO.76 青梅街道沿いの小川分水と小川新田



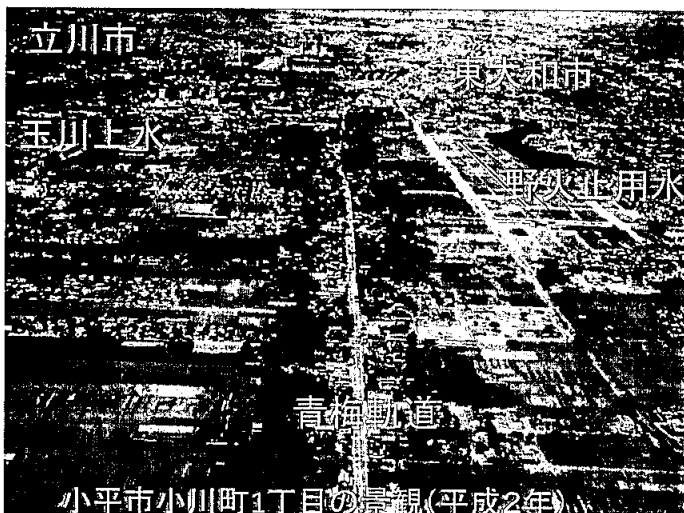
小川分水は、玉川上水開削直後の野火止用水、明暦3年(1657)の砂川分水に次ぐ古い分水である。砂川村の発展を見て狭山丘陵岸村の小川氏が現在の地に新田開発を願い出た。青梅の石灰を江戸に運ぶための伝馬継宿が田無と箱根ヶ崎の間が長く不便なためこれを解消することも目的としていた。



小平はもともと平坦な地で青梅街道の南北方向に短冊形の地割をした。母屋の裏側に水路を引く整然とした集落が形成された。

小川分水の青梅街道南北分岐水門と小川分水南堀

NO.77 武蔵野を象徴する新田集落の風景



小川新田の基本的な地割は間口約20m、奥行き約600mの短冊形。道路から垣根・ケヤキ、屋敷・庭、水場・水路、屋敷林、たから道、畑、雑木林の配列を基本。ケヤキを主体とした沿道景観と馬継の庭周り、屋敷と周辺の屋敷林の景観が構成される。

屋敷林に囲まれた水路・水場を中心の日常性と畑作物の出荷準備、たから道が通る。畑地の奥には堆肥や薪炭を賄うための雑木林を経営。新田の生産と生活を支えてきた。この統一的な土地利用とその持続的な経営により武蔵野の象徴的な景観が今なお継承される。



3. 玉川上水下流区間・新宿区 小山 裕三（NPO 法人新宿活動環境ネット）

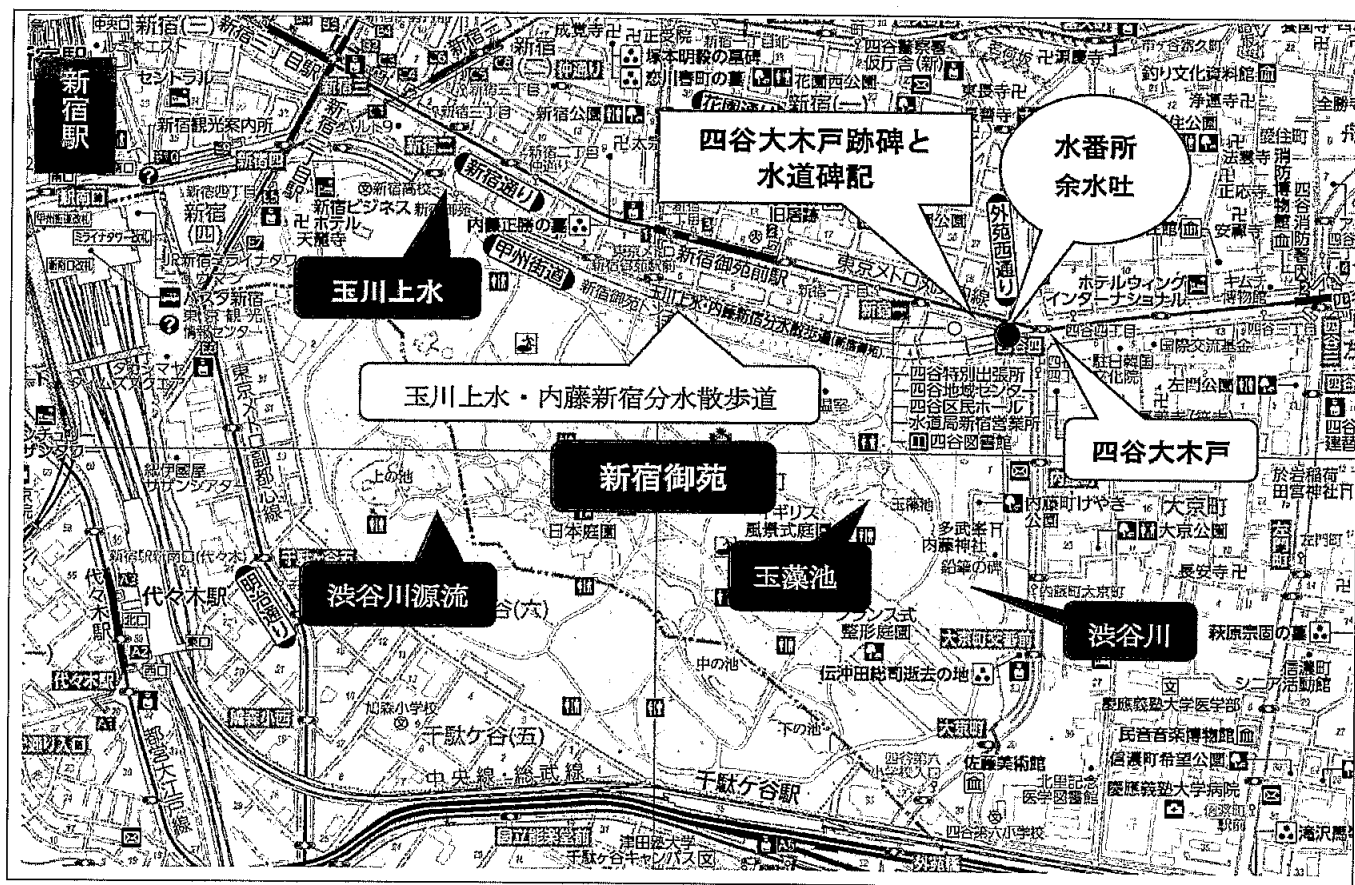
現在、玉川上水を開渠で見ることのできるのは、杉並区の浅間橋までで、その先は暗渠になっている。しかし、暗渠と言っても上水路は大部分が緑道として残されている。また、一部は開渠として残されている。

玉川上水の下流部は代田橋・笹塚の開渠から始まる。笹塚橋から世田谷区に入ると長い緑道になる。十二社通りに出ると左側に新宿中央公園と超高層ビル群が目に入る。ここには、昭和40年（1965）まで淀橋浄水場があった。

さらに甲州街道に沿って水路跡の道は続き、新宿駅の南口を抜けると新宿御苑の新宿門になる。御苑には「玉川上水・内藤新宿分水散歩道」という名の散策路がある。実際の玉川上水路はこの散策路に沿った左側、新宿御苑と旧甲州街道（新宿通り）の間の道路（甲州街道）がそれにあたる。大木戸門に来ると、前方の四谷地域センターの御苑側が開渠の玉川上水43kmの終点の地になる。ここから先玉川上水は地下の石樋や木樋で江戸市中へと流れて行った。

100選エントリー遺構

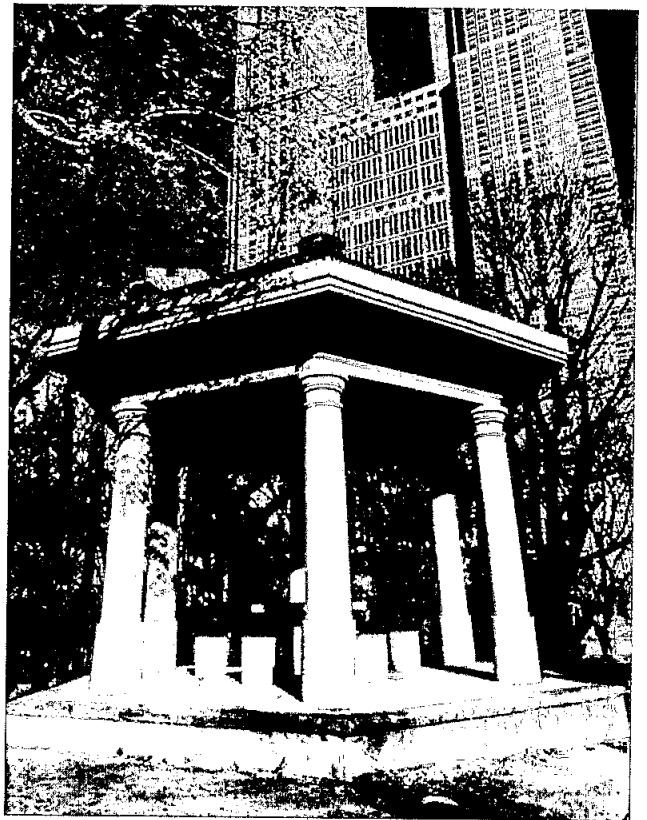
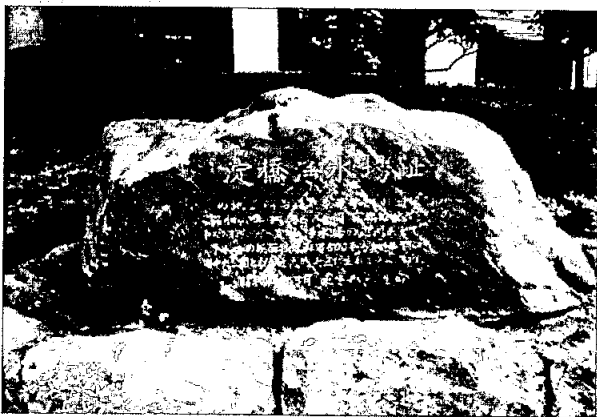
番号	名称	100選番号
	代田橋・笹塚橋間の開渠遺構	No. 26
1	玉川上水と淀橋浄水場跡地	No. 27
2	新宿御苑と四谷大木戸	No. 28
	玉川上水の余水吐と渋谷川	No. 29
3	四谷大木戸跡碑と水道碑記	No. 30
4	四谷市中配管と御門掛樋	No. 31
	淀橋浄水場から外濠・内濠への導水管	No. 32
5	市中配管石樋・清水谷公園	No. 33
6	神田上水の助水堀跡	No.100



No. 28 玉川上水と淀橋浄水場跡地

担当：NPO 法人新宿環境活動ネット

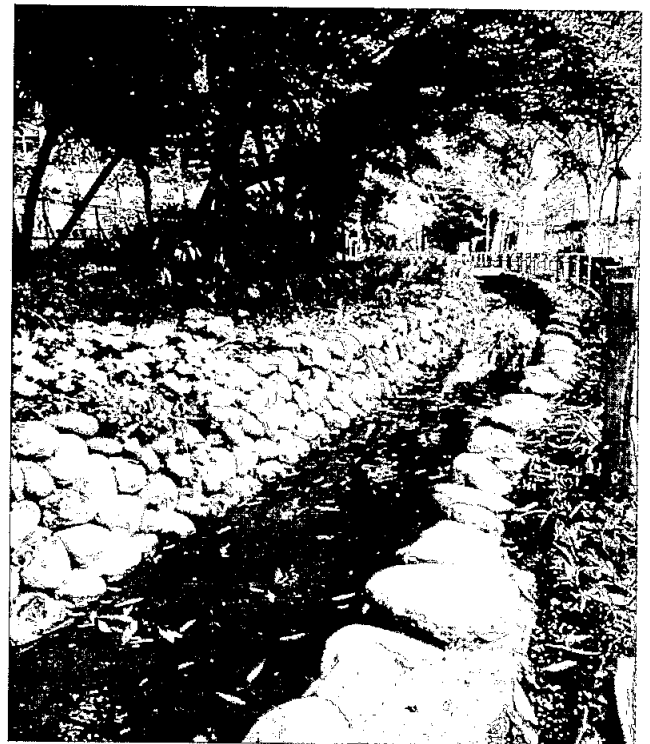
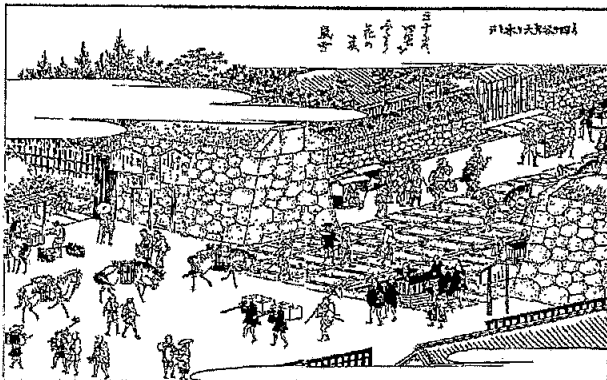
明治 19 年 (1886) に全国でコレラが大流行。これを契機として、淀橋の浄水場、新水路整備と市中の鉄管による水道管敷設がはじまる。明治 31 年 (1898) に竣工、東京の近代的水道の嚆矢となる。一方で、東京の人口の増加、新宿周辺の都市化の進展等により、大正末期には早くも淀橋浄水場の拡張移転、跡地再開発等の動きも出てくる。昭和 40 年 (1965) に浄水場が移転。浄水場跡地に、敷地形状や池と地面の 2 層構造や新宿中央公園内の六角堂等にその面影を留めている。



No. 29 新宿御苑と四谷大木戸

担当：渋谷川・水と緑の会

四谷大木戸のある地域は、幕府からの信認の厚かった内藤家の屋敷がもうけられていた。また、南に渋谷川の流頭が迫り維持管理の条件にも恵まれていた。このため、沈砂池や水質・水量を監視する四谷大木戸の水番所（屋）が設けられ、ここから江戸市中へ管路で地下配水されていた。平成 22 年 (2010) には玉川上水を偲び価値を後世に伝えるため「玉川上水・内藤新宿分水散策道」が整備されている。

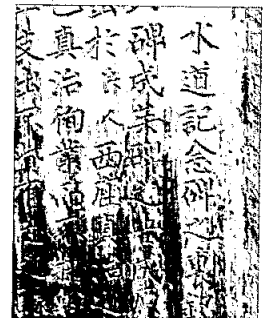
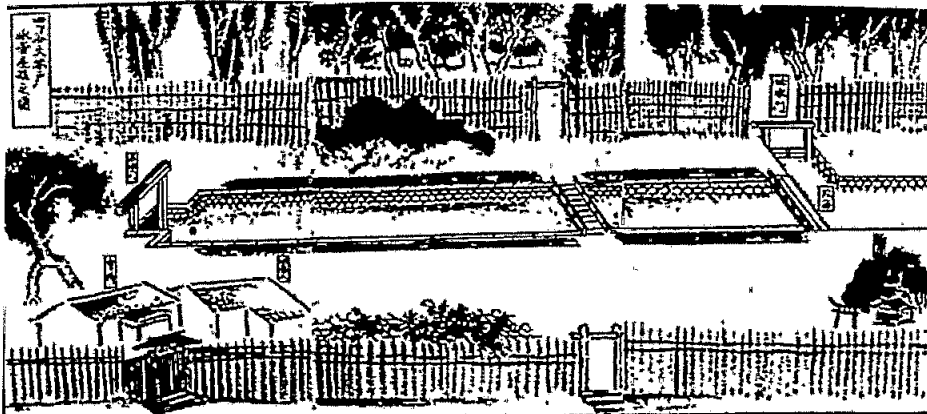


No. 31 四谷大木戸跡碑と水道碑記

：担当：NPO 法人新宿環境活動ネット

承応 3 年（1654）に開渠の玉川上水路の終点となる四谷大木戸に水番所を設けた。

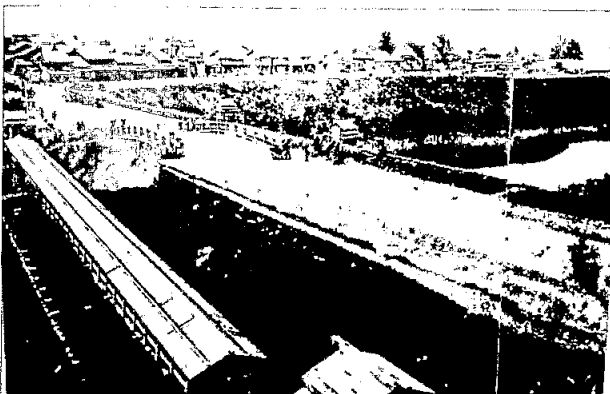
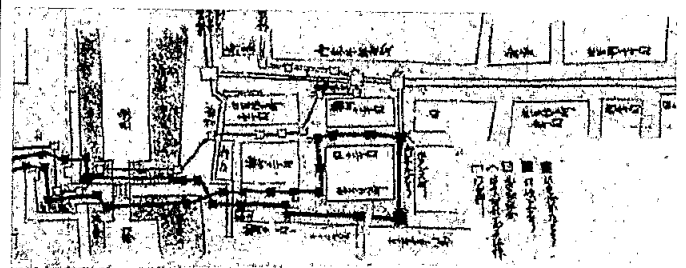
玉川上水の配水の起点となる水番所跡には、玉川上水の石樋（蓋の部分）を利用して造られた「四谷大木戸跡の碑」と水番所を記念して明治 28 年（1895）に設置された「水道碑記」が設置されている。碑は民間の西座真治が造ったもので、表面には明治 18 年の年記が刻まれているが、真治の死により建立が中断になり、それを妻ふくの尽力で明治 28 年に完成に至った。（そのいきさつは碑の裏面に刻まれている）。



No. 32 四谷市中配管と御門掛樋

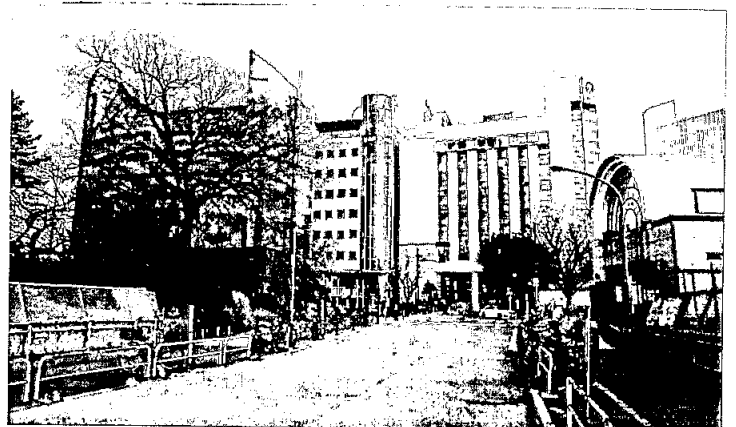
：担当：NPO 法人新宿環境活動ネット

玉川上水は、四谷大木戸水番所の沈砂池を過ぎると、本線は石樋に入り現在の新宿通りを四谷御門まで流れる。ここから、本丸、吹上、武家・町方木製の 3 本に分かれ木製の掛樋で濠を渡る。本丸、吹上にはそのまま直進し半蔵門を通過して城内に入る。もう 1 本は、外濠の縁を南廻りで溜池、虎ノ門方面の武家・町方に給水していた。



「明治元年の四谷見附」

『東京そのむかし』より



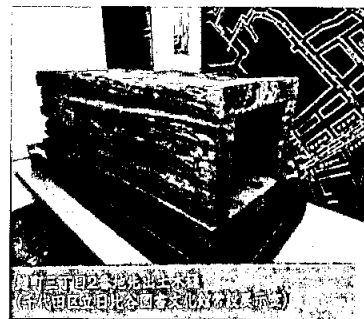
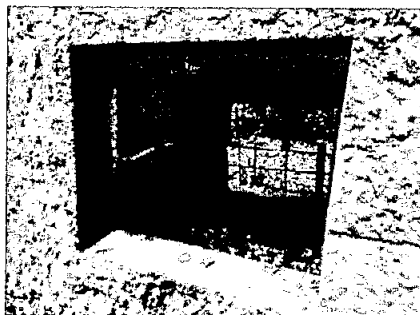
No. 33 市中配管石枡・清水谷公園

担当：NPO 法人新宿環境活動ネット

昭和 45 年（1970）に新宿通り麹町 3 丁目付近で拡張工事をしていた折に玉川上水の水路の石枡と木樋が出土した。このルートは玉川上水が四谷門を抜け半蔵門から本丸・吹上御所へ至る幹線にあたる。

この石枡は現在、紀尾井町の清水谷公園に保存展示されている（同時に出土した木樋は日比谷図書館に展示）。

この石枡は全て手作業で削り抜いており、その大きさと労力は目を見張るものがある。



No. 6 神田上水の助水堀跡

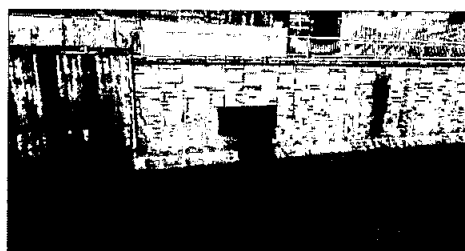
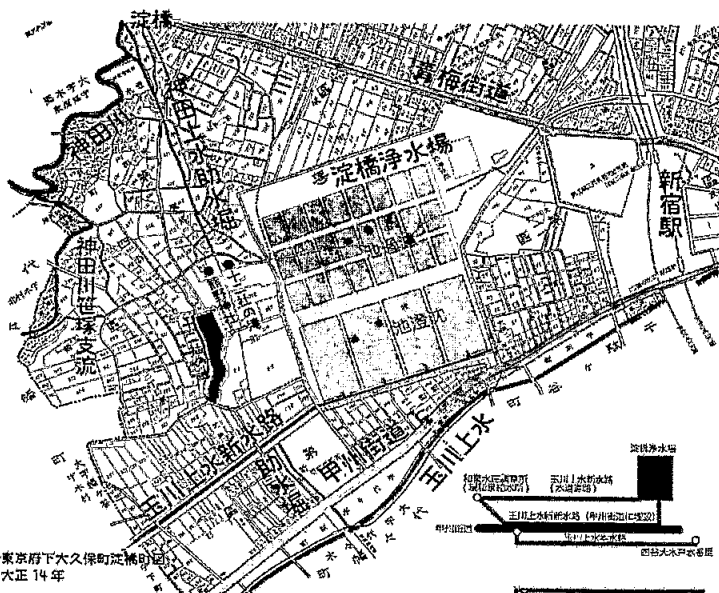
担当：NPO 法人新宿環境活動ネット

No. 100

玉川上水が開削されて 10 数年後の寛文 7 年（1667）に神田上水の助水するために、淀橋に助水堀を開削した。延方 2 年（1674）には、水車も稼働させていた。

ルートは概ね現在の十二社通りに沿って、熊野神社脇、けやき公園を通り、淀橋で神田川に注いでいた。

淀橋浄水場の建設に伴い助水路の役割は終え、排水路として転用されていた。現在は暗渠化され、けやき公園、神田川の淀橋排水口等にその面影とどめている。



4. 外濠 高道 昌志（外濠再生懇談会）

市民団体提案遺構と100選

市民団体提案遺構			100選遺構		摘要
番号	所在地	名称	番号	名称	
①	新宿区	新四ツ谷見附橋	32	四谷市中配管と御門掛樋	新宿活動ネットとの共同提案
②	港区 千代田区	弁慶濠	36	溜池と弁慶濠	
③	新宿区 千代田区	真田濠	35	真田濠跡	
④	港区	玉川稲荷			
⑤	港区	大下水跡			
⑥	千代田区	清水谷公園 石枡	33	市中配管石枡と清水谷公園	新宿活動ネットとの共同提案
⑦	新宿区 千代田区	市ヶ谷濠・新見附濠・牛込濠	37	市ヶ谷濠・新見附濠・牛込濠	外濠公園を含む
⑧	新宿区 千代田区	外濠公園			



東京電機鉄道 外濠線の軌道跡

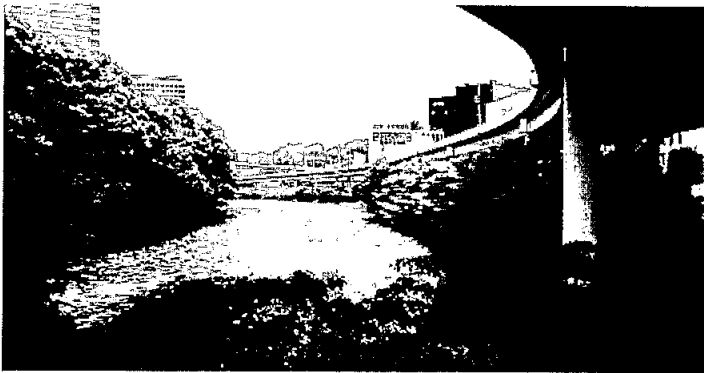


真田濠を埋め立てた上智大学グラウンド

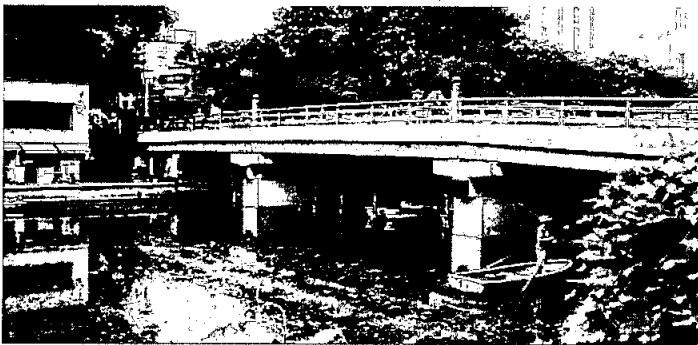


旧甲武鉄道 御所トンネル

遺構番号 No.35：真田濠



弁慶濠の全景



日本初の景観論争の舞台 弁慶橋



赤坂見附の大規模な石垣群

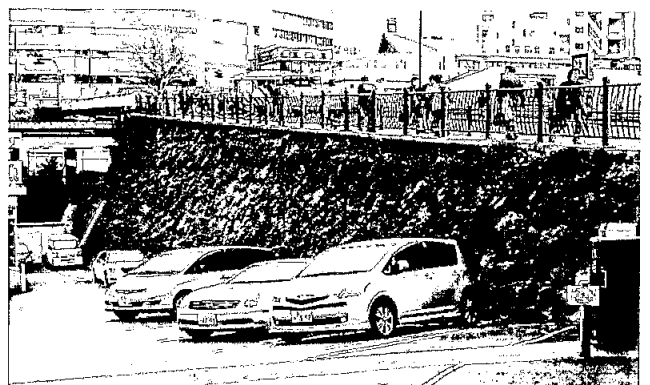
遺構番号 No36 : 溜池と弁慶濠



市ヶ谷濠（上）・新見附濠（下）の全景



ほぼ全容を留める牛込見附石垣

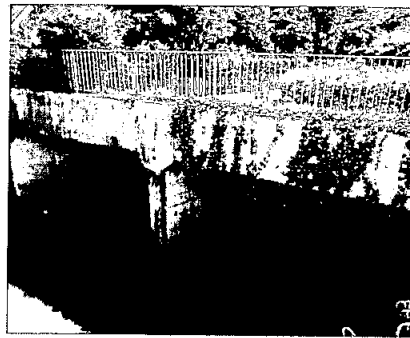


刻印石を残す市ヶ谷見附橋石垣遺構

遺構番号 No.37 市ヶ谷濠・新見附濠・牛込濠



牛込濠から流れ込む牛込見附下



神田川流出ポイント



延命地藏尊

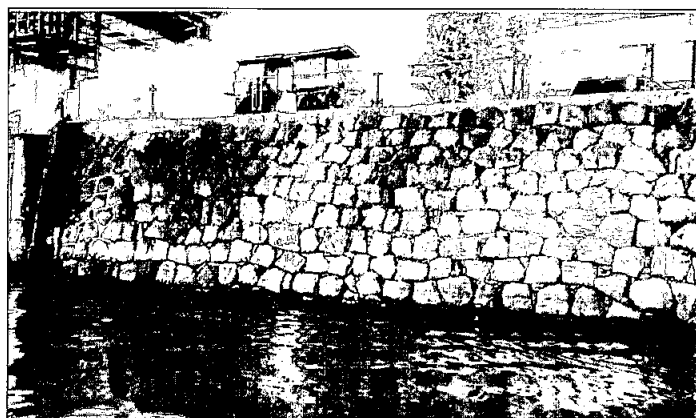


かつての物揚場をイメージした濠跡の公園

遺構番号 No.38 飯田濠跡と外濠の神田川流出

5. 日本橋川 工藤 哲夫（水辺再生研究会）

No. 40 日本橋川の外濠石垣と常盤橋御門



外濠石垣

徳川幕府は江戸城およびお濠や石垣工事にともなう石材採取をおよび運搬を中国・四国・九州の大名に命じ、主に伊豆半島の東海岸より切り出した。石には関わった大名家の家紋や組頭・石工とうの目印が刻まれているものもある。

常盤橋

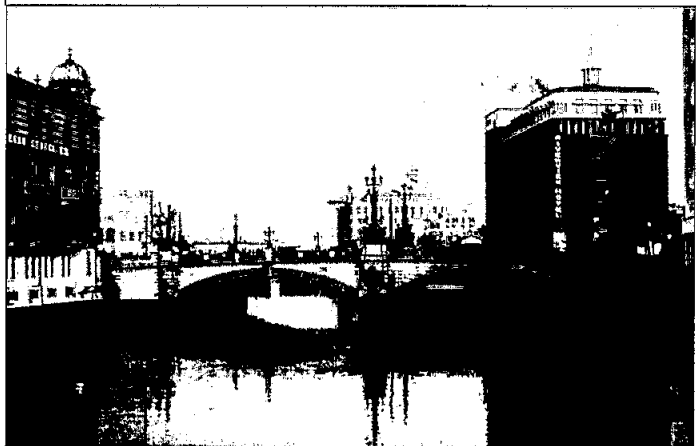
元は「大橋」と称され、江戸城の大手門から浅草に直接向かう本町通り（現在の江戸通りの原型とされる）上に置かれていた。また、浅草に通じていることから「浅草口橋」とも呼ばれた。1629年（寛永6年）、常盤橋の前に常盤橋門が設置され、この頃に「常盤橋」の名称が登場したと考えられている。

明治になってから、石造のアーチ橋の常盤橋が造営されたものの、手狭であることから後に現在の常盤橋が造営されて、旧橋は「常磐橋」と呼ばれるようになった。2007年（平成19年）3月28日に常磐橋・常盤橋はともに千代田区景観まちづくり重要物件に指定された。

旧橋は経年と東北地方太平洋沖地震の影響による損傷で2011年（平成23年）より通行禁止となっていたが、2013年（平成25年）より修復工事が行われている。



No. 41 日本橋と五街道起点・道路元標



日本橋

現在の橋梁は1911年に完成し、国の重要文化財である。また、日本の道路元標があり、日本の道路網の始点となっている。

現在の橋は19代目または20代目にあたるとされる。1903年（明治36年）の市区改正計画により、幅6間以上の橋梁は鉄橋もしくは石橋を架設することに定められたため、木造だった以前の橋（明治5年築）に替わり、大都市東京にふさわしい新たな橋として1908年（明治41年）に着工、1911年（明治44年）に完成した。

石造二連アーチ橋で、橋の長さ49メートル(m)、幅27m、設計は米本晋一。橋柱の銘板にある「日本橋」の揮毫は徳川慶喜によるものである。

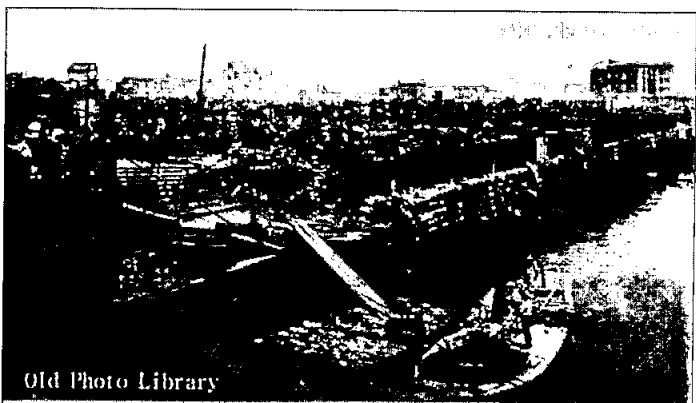
道路元標

明治6年12月20日、明治政府は太政官達第413号で、「里程元標」（りていげんぴょう）を設けることを定めます。明治44年、現在の日本橋の架橋時に当時の道路法施行令第八条によって橋の中央に「東京市道路元標」が設置されました。

大正9年4月1日に道路法にもとづいて認定された国道の一覧（大正9年内務省告示第二十八号）でも国道の起点は日本橋とされています。日本橋の中央にあった「東京市道路元標」

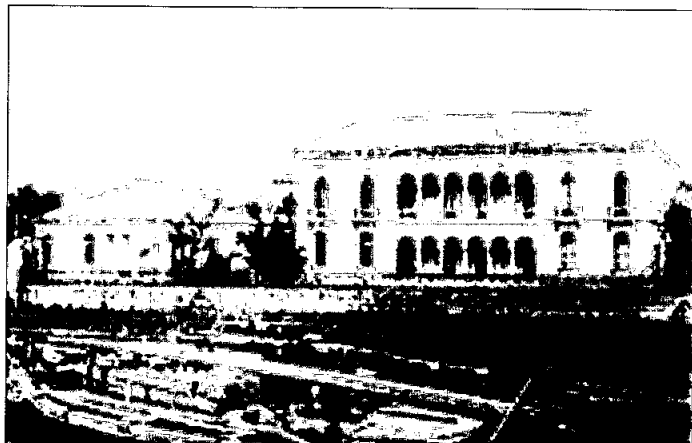
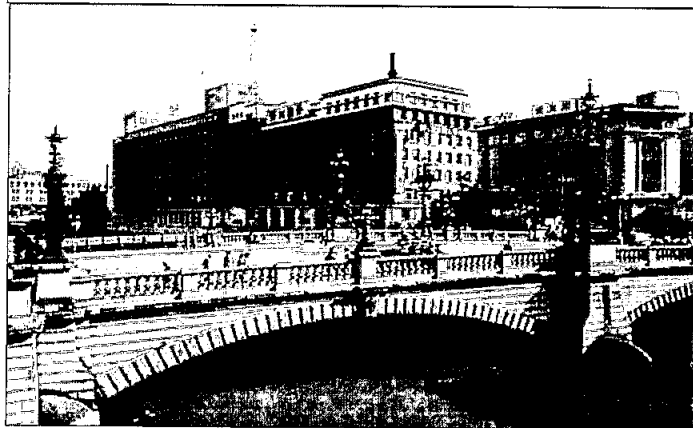


No. 42 日本橋川の舟運と魚河岸跡



THE RIVERSIDE FISHMARKET TOKYO 江戸のしほ魚松本日 (東京の魚河岸)

提案遺構 (100 選外)



魚河岸

日本橋から江戸橋にかけての日本橋川沿いには、幕府や江戸市中で消費される鮮魚や塩干魚を荷揚げする「魚河岸」がありました。ここで開かれた魚市は、江戸時代初期に佃島

の漁師たちが将軍や諸大名へ調達した御膳御肴の残りを売り出したことに始まります。

この魚市は、日本橋川沿いの魚河岸を中心として、本船町・小田原町・安針町（現在の室町一丁目・本町一丁目一帯）の広い範囲で開かれ、大変なにぎわいをみせていました。

大正 12 年（1923）の関東大震災で、壊滅的な被害を受け、築地へ移転となり、300 年余りの歴史に幕を下ろした。

野村銀行

野村財閥の中核として大阪に本店を置いた野村銀行の東京進出の拠点となる建物として計画され、東京府東京市日本橋区通一丁目 1 番地（現・東京都中央区日本橋一丁目 9 番 1 号）の地において、1928 年（昭和 3 年）6 月 8 日起工され、1930 年（昭和 5 年）3 月 15 日竣工した。

第二次世界大戦で日本が敗戦した後の 1946 年（昭和 21 年）11 月 3 日、占領軍は本建物およびその別館を接收し、1952 年（昭和 27 年）10 月 20 日の接收解除まで供された [1]。竣工後増築された。

2012 年に DOCOMOMO JAPAN 選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築に選ばれた。

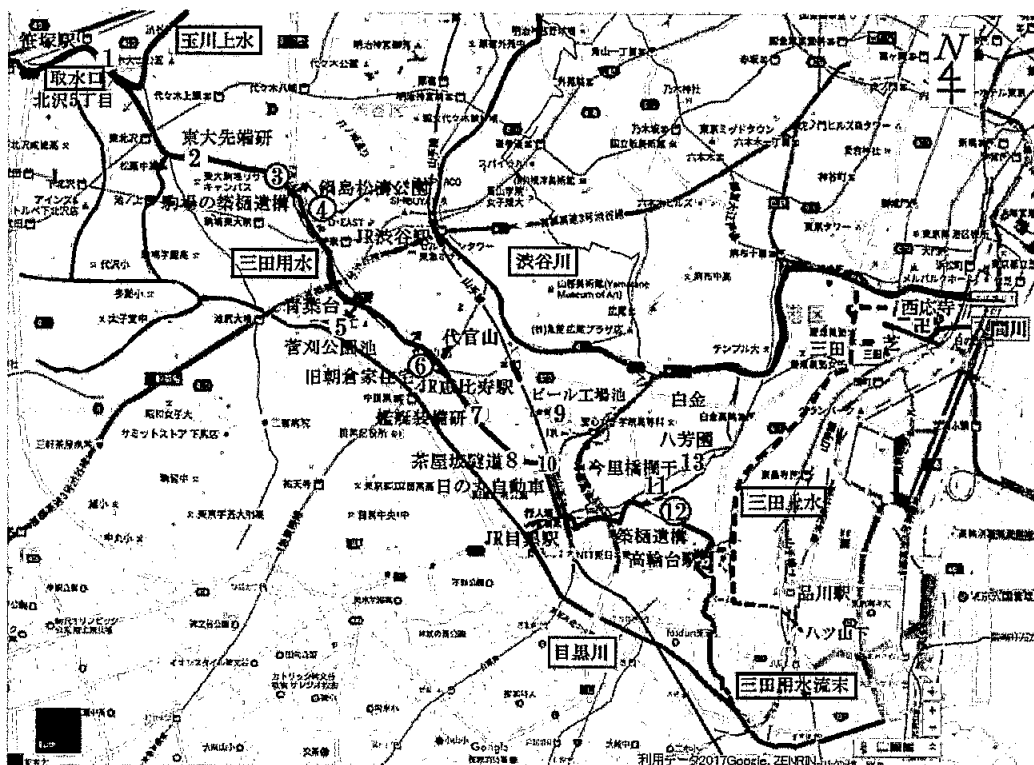
日証館

1928 年（昭和 3 年）、第一国立銀行・東京株式取引所などの創立者として知られる渋沢栄一翁の邸宅跡地に、東京株式取引所によって日証館は建設されました。1943 年（昭和 18 年）の日本証券取引所設立後に日証館と呼ばれるようになりました。戦後は証券会社数が激増し、1951 年（昭和 26 年）には 35 社の証券会社が入居する事務所ビルとして使用されました。

6. 玉川上水分水・三田用水 梶山 公子（渋谷川・水と緑の会）

〔歴史と概要〕

三田用水は玉川上水の分水で、明暦3年（1657）に細川越中守の伊皿子屋敷（高輪皇族邸）に引いた細川上水と、寛文4年（1664）に三田・芝に給水するため細川上水と並んで開削された三田上水を用いて作られた。この二つの上水は享保7年（1722）に幕府の命で廃止されたが、享保9年（1724）に地元の14ヶ村の請願により、三田用水の北沢村の取水口から白金猿町（高輪台駅）までが灌漑用水として払下げられた。その名も三田用水と改められ、村人が自主的に管理した。取水口は3尺四方（縦横90.9cm）、川幅は約1間（181.8cm）で、野火止用水に次ぐ大きさであった。ルートは玉川上水・北沢村（北沢5丁目）に始まり、目黒川と渋谷川との間の台地を東南に進んで白金猿町へ流れ、その後は北品川を南下して目黒川に注いだ。長さは北沢村から白金猿町まで約8.5km、目黒川まで約10kmで、17の分水口があった。勾配は取水口から高輪台までは13.4cm/100mの緩い斜面を流れ、猿町からは急勾配で目黒川に下った。昭和50年（1975）に使用が終わって311年の歴史を閉じた。



北沢5丁目の取水口

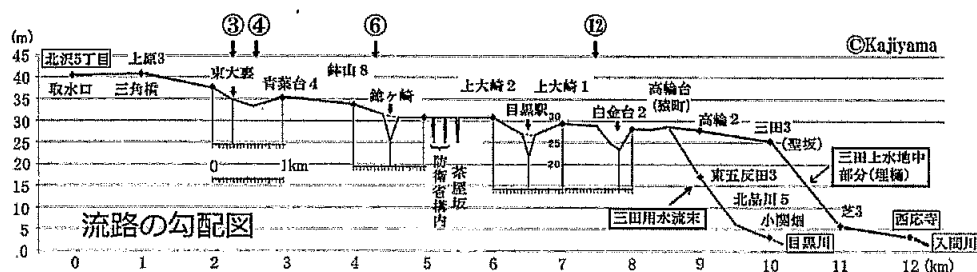


日本ビールの目黒工場の池



目黒川小関橋付近

三田用水のルートとエンリ遺構13件（図中の番号1～13）。丸の付いた番号は採択された4件。詳細は次ページの表。図の右側の点線部分は三田用水の時代になって廃止された三田上水の南北の流れ。



縦軸は標高（m）。横軸は1km間隔。地名の数字は丁目。丸番号は採択の4件。下北沢村一猿町（高輪台駅）の勾配は13.4cm/100m。流末の猿町一、目黒川は176.0cm/100m。

〔三田用水の用途〕三田用水は田畑の灌漑用水や生活用水として始まったが、江戸の末期から精米・脱穀・製粉の水車にも使われるようになり、明治になると火薬、綿糸、薬品を作る動力など様々な目的で用いられた。三田用水とその分水には明治末に49台の水車が架けられ、場所は渋谷川や目黒川へと流れる斜面に集中していた。目黒の火薬庫製造所は鉄製の水車を回し、その跡地の海軍技術研究所は艦艇装備のための実験用貯水池¹を作った。日本麦酒は水を大量に貯めてビール製造を行い、農科大学では実習田（ケルネル田んぼ）に用水を使った。流れの西側の崖線は風光明媚なことから、有力大名や政治家、豪商の庭園用水としても使われた。

「市民が選ぶ玉川上水・分水網の関連遺構 100 選」にエントリーした三田用水の遺構 13 件と採択された 4 件

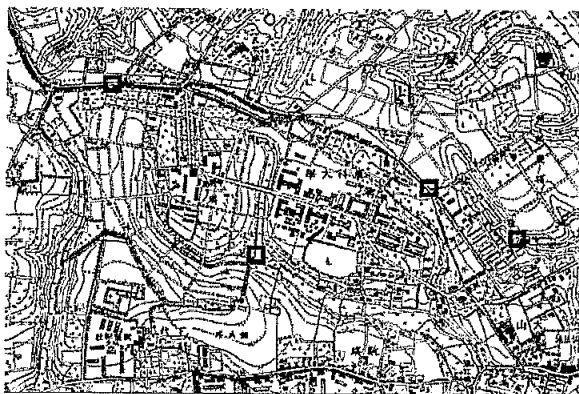
図番号	三田用水のエントリー遺構の名称	100 選の番号	地図番号	三田用水のエントリー遺構の名称	100 選の番号
1	玉川上水の三田用水取水口跡		8	水路跡の茶屋坂隧道の看板	
2	東大先端科学技術研究センター・正門前の「橋の欄干」		9	恵比寿が「デゾレ」・エビスビール記念館模型「ビール工場の貯水池」	
③	三田用水・駒場の築樋遺構	No. 96	10	日の丸自動車前の「三田用水跡」碑	
④	鍋島松濤公園の池泉と水車の復元	No. 97	11	今里橋の欄干と家屋の下の水路跡	
5	西郷橋と菅刈公園の池		⑫	三田用水・白金 3 丁目築樋遺構	No. 99
⑥	「旧朝倉家住宅」の池泉遺構	No. 98	13	八芳園の池	
7	艦艇装備研究所（旧海軍技術研究所）の実験用貯水池				

No.96 三田用水・駒場の築樋遺構

(渋谷区富ヶ谷 2 丁目 2 1)



駒場の築樋遺構。残存する遺構の長さは約 40m、高さは 66-90cm。この場所から三田用水・神山口分水が流れ出て、鍋島松濤公園を通って宇田川に向かった。遺構の構造物の中頃にある蓋には分岐点を示す金具がある。



明治後期の築樋遺構の周辺。三田用水は駒場にある農科大学の実習田に使われていた。「世田谷」『一万分の一地形図 東京近傍 明治 42 年測図』より作成。地図中、四角い印は筆者の加筆で、右の現代図の四角に対応。

駒場の築樋遺構は、玉川上水・北沢取水口から東南に 2km ほど下った山手通り信号「東大裏」の南方、東京大学駒場キャンパスと山手通りの境にある。この土地には起伏があるため、築樋を用いて水路の嵩上げをして高さを調整した。築樋は昭和にヒューム管（コンクリート製）に改修された。

駒場の土地は江戸時代には「駒場原」と呼ばれる将軍の御鷹場で、三田用水はその周囲を流れて南に向かっていった。明治時代に入ると駒場に農科大学（後の東大農学部）が設立され、敷地の南側に三田用水を用いた実験田んぼ（ケルネル田んぼ）を作って米の肥料の研究などを行った。少し上流の東大先端科学技術研究センター正門前には、昭和に入って設けられた三田用水の橋の欄干も残っている。



左図の現代図。北沢から来た三田用水は東大先端研の前を流れ、駒場の築樋を通して青葉台方面へ向かった。この辺りは江戸時代は「駒場原」と呼ばれる将軍の御鷹場で、広重『江戸名勝図絵』に風景と勇猛な鷹を描いた「駒場野」がある。2019 Google.

「市民が選ぶ玉川上水・分水網の関連遺構 100 選」にエントリーした三田用水の遺構 13 件と採択された 4 件

図番号	三田用水のエントリー遺構の名称	100 選の番号	地図番号	三田用水のエントリー遺構の名称	100 選の番号
1	玉川上水の三田用水取水口跡		8	水路跡の茶屋坂隧道の看板	
2	東大先端科学技術研究センター・正門前の「橋の欄干」		9	恵比寿が「デフ・プレイス・エビスビール」記念館模型「ビール工場の貯水池」	
③	三田用水・駒場の築樋遺構	No. 96	10	日の丸自動車前の「三田用水跡」碑	
④	鍋島松濤公園の池泉と水車の復元	No. 97	11	今里橋の欄干と家屋の下の水路跡	
5	西郷橋と菅刈公園の池		⑫	三田用水・白金 3 丁目築樋遺構	No. 99
⑥	「旧朝倉家住宅」の池泉遺構	No. 98	13	八芳園の池	
7	艦艇装備研究所（旧海軍技術研究所）の実験用貯水池				

No.96 三田用水・駒場の築樋遺構

(渋谷区富ヶ谷 2 丁目 2 1)



駒場の築樋遺構。残存する遺構の長さは約 40m、高さは 66-90cm。この場所から三田用水・神山口分水が流れ出て、鍋島松濤公園を通って宇田川に向かった。遺構の構造物の中頃にある蓋には分岐点を示す金具がある。



明治後期の築樋遺構の周辺。三田用水は駒場にある農科大学の実習田に使われていた。「世田谷」『一万分の一地形図 東京近傍 明治 42 年測図』より作成。地図中、四角い印は筆者の加筆で、右の現代図の四角に対応。

駒場の築樋遺構は、玉川上水・北沢取水口から東南に 2km ほど下った山手通り信号「東大裏」の南方、東京大学駒場キャンパスと山手通りの境にある。この土地には起伏があるため、築樋を用いて水路の嵩上げをして高さを調整した。築樋は昭和にヒューム管（コンクリート製）に改修された。

駒場の土地は江戸時代には「駒場原」と呼ばれる将軍の御鷹場で、三田用水はその周囲を流れて南に向かっていった。明治時代に入ると駒場に農科大学（後の東大農学部）が設立され、敷地の南側に三田用水を用いた実験田んぼ（ケルネル田んぼ）を作って米の肥料の研究などを行った。少し上流の東大先端科学技術研究センター正門前には、昭和に入って設けられた三田用水の橋の欄干も残っている。



左図の現代図。北沢から来た三田用水は東大先端研の前を流れ、駒場の築樋を通って青葉台方面へ向かった。この辺りは江戸時代は「駒場原」と呼ばれる将軍の御鷹場で、広重「江戸名勝図絵」に風景と勇猛な鷹を描いた「駒場野」がある。2019 Google.

No.97 鍋島松濤公園の池泉

(渋谷区松濤 2 丁目 10-7)

渋谷の鍋島松濤公園は、駒場を流れていた三田用水の東側に位置している。江戸時代は紀州徳川家や旗本長谷川家の屋敷があり、駒場の築樋遺構(N0.96)の場所から神山口分水の流れが屋敷に引かれていた。分水の流れは屋敷の湧水池に入り、その後は池から出て東側を流れる宇田川（渋谷川支流）に注いでいた。神山口分水の入口近くと現公園の東端の土地には水車が設けられ、精米や脱穀をしていた。

明治になると、旧佐賀藩主の鍋島侯爵がこの土地を手に入れて茶園の「松濤園」を起こした。現在の松濤町の名の由来である。後に当主が欧米の農業技術を導入して「鍋島農場」を経営した。農場は明治後期まで続いたが、大正 11 年の関東大震災を境に宅地として分譲された。昭和 7 年、湧水池と周りの土地が児童遊園として東京市に寄付されて現在の鍋島松濤公園となった。



鍋島松濤公園の池と水車。神山口分水には 2 台の水車が架かっていた。松濤池には水車のモデルを復元し、この土地にかつて水車と近代農業が栄えていたことを今に伝えている。



駒場の築樋遺構の場所から神山口分水が流れ出て、水車を回した後には鍋島農場に入った。種畜牧場の池（鍋島松濤公園の池）から流れ出た後も水車を回して宇田川（渋谷川支流）に注いでいた。「世田谷」

『一万分の一地形図 東京近傍 明治 42 年測図』

No.98 旧朝倉家住宅の池泉遺構

(渋谷区猿楽町 2 9-20)



上段は旧朝倉家住宅、下段は三田用水を引いた庭園の石組み。

三田用水は、大山街道から青葉台を南へ下り、旧山手通りに沿って淀橋台の西側の縁を猿楽町へと流れていた。台地の麓には目黒川が流れており、この辺りは水利と交通の便に恵まれていた。

朝倉家は江戸末期にこの地に住み、三田用水を使った水車で精米・脱穀を始めて成功した。屋敷は当初、猿楽町の旧山手通りの南西斜面に建てられていたが、明治時代に入り東京府議会議長になった当主の朝倉虎治郎は辺りの土地を買い集め、大正 8 年（1919）に目黒川を望む台地の縁に大きな屋敷を構えた。そこに三田用水を引き込み、庭に崖の地形を巧みに用いた水路や小滝を配し、富士山や目黒川の眺めを生かした池泉回遊式庭園を作った。都心部に残る和風建築の主屋と土蔵が大正時代の趣を残して貴重であるため、平成 16 年（2004）に国の重要文化財に指定された。

なお朝倉邸の約 500m 手前の青葉台には、明治の元勲・西郷従道が兄隆盛のために買い求めた伝えられる旧岡藩中川家の屋敷があり、高度差 20m ほどの自然の崖を用いた見事な庭園と滝が作られていた。後に目黒区が入手し、西郷公園・菅刈公園として公開されている。

No.99 三田用水・白金台3丁目築樋遺構

(港区白金台3丁目12-30)



築樋遺構。赤いレンガ敷きの道は三田用水の水路の位置を示す。



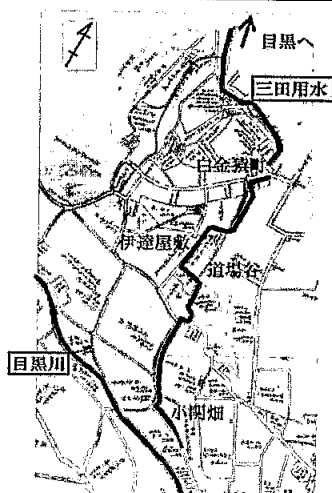
築樋遺構の少し手前に架かる今里橋。昭和初期に作られた鉄筋コンクリート製で、長さは約3m。

淀橋台の西縁を辿りながら南下した三田用水は、JR 目黒駅前で東にほぼ直角に曲がり白金台へと流れていた。この辺りの地形を見ると、白金台3丁目の先で高輪台との間の標高が低くなっている。このため盛り土をして堤を築き、その上に水路を設けて水を自然に流下させた。築樋遺構は、大谷石で築かれた堤の一部と水路の垂直の断面で、切り口の部分は保存のためにコンクリートのU字型で固められ、中は左右に仕切られている。また当時の水路跡は赤いレンガ敷きの道になっている。

明治42年(1909)測図の『一万分の一地形図』によると、この遺構の少し手前には、南に向かう久留島上口(下大崎村、北品川宿)と北に向かう久留島上口(今里村)の2系統の分水路が設けられていた。南の久留島上口分水の斜面には水車が3台架かっていた。三田用水の本流は高輪台駅近く(白金猿町)まで流れ、そこで地中に潜り、町を出てから地上に現れ、北品川の急坂を下って目黒川に注いでいた。

この築樋遺構は当時の水路の様子を伝える上で大切な遺産であり、地元の方々と港区教育委員会の保全活動と土地開発者の協力に感謝したい。築樋遺構の周りには他にも構造物が埋まっていると思われる。この土地が環状4号線の延伸区間(白金台3-港南)に当たるため、現在の築樋遺構の保全・調査と共に、新たな遺構が発掘されることを期待したい。

参考資料—三田用水の流末のルート



「文政十一年品川図」『品川町史』には文政11年(1828)頃の三田用水の流末ルートが描かれている。記述が詳しいことから、町か村の名主が江戸町奉行に出した調書の一部であろう。三田上水の時代は白金猿町が三田・芝への中継点で、ここで余水が目黒川に捨てられていた。三田用水の時代になると、目黒川までの水路が整えられた。左図を見ると、白金猿町の外れから地表に出た三田用水は、その先の道場谷には落とされず、西側の仙台藩伊達家の屋敷(清泉女子大学)の斜面を大きく回り、北品川や大崎村の田畑を潤しながら下って河原に入り、目黒川手前の小関畑で途切れていた。水嵩の多い時は川に直接流れ込んでいたであろう。明治には斜面に水車が架けられていた。村人たちが三田用水を一滴も余さず使おうとしていた様子がよく分かる。

<参考文献・資料> 三田用水普通水利組合『江戸の上水と三田用水』岩波ブックセンター信山社 昭和59年、渡部一二『武蔵野の水路—玉川上水とその分水路の造形を明かす』東海大学出版会 2004年、小坂克信『近代化を支えた多摩川の水』東急環境財団 2012年、渋谷区立白根記念郷土文化館編『渋谷の水車業史』渋谷区教育委員会 昭和61年、『東京市史稿』上水篇第1・第2 東京市役所 大正8・12年、『品川町史』上・中・下巻 品川町役場 昭和7年、『新修渋谷区史』上・中・下巻 東京都渋谷区 昭和41年、『目黒区史』『同資料編』東京都目黒区 昭和36年、『貞享上水図』国立国会図書館蔵、『白金・三田』『内務省地理院 明治20年測量 五千分の一』、『一万分の一地形図 東京近傍 明治42年測図・假製版』陸地測量部、前掲『一万分の一地形図、大正10年第2回修正測図同14年部分修正』他。

(文